



2007.1.1

魯迅「出乎意表之外」の意表外.....樽本照雄 1  
 出版社の図書目録 .....神田一三 7  
 晩清小説作者掃描(玖) .....武 禧17  
 清末小説から19 本年もよろしくおねがいたします 【予告】林紓についてこれまで90年余にわたって信じられてきた定説を打破する論文を発表します。『清末小説』第30号に掲載予定です 『清末小説』第29号を発行しました。また『漢訳アラビアン・ナイト論集』『漢訳ホームズ論集』『商務印書館研究論集』『清末小説研究集稿』については、後ろの広告をご覧ください。  
 『阿英『晩清小説史』ほか索引』を刊行予定

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

魯迅「出乎意表之外」の意表外

樽本照雄

古文の大家林紓が誤用したのを魯迅が皮肉って使用した。そう注釈には書いてある。私は、そうなのだばかり思っていた。表題に示した「出乎意表之外」のことだ。

意表の外に出る。一見どこが間違っているのかわかりにくい。日本語では通用

するような気がする。だが、すべての注釈が、それは誤用だと説明しているのだ。私の漢語に関する感覚が悪いに違いない。

人の意表をつく、意表に出る、思いもおよばないこと、だ。漢語では「出人意表」と表わすのが普通である。同じ意味で「出人意料之外」がある。「意料」を「意表」に置き換えれば可能なような気もする。しかし、そうはならない。「意表」の「表」が「外」を意味し、それだけで「意料之外」となる。それに「之外」をつけるとさらにその外になる、という理屈だ。

漢語辞典には、「出乎意表」「出乎意料」と並べて「出乎意外」がある。それらはすべて同じく「出於意料之外」なのだ。従来の解釈通りになる。

日本語の説明でも「意表」は「意外」となっている。しかし、同時に「意表外」

ということばも収録しており、そうならばこちらは「意外外」ではなかろうか。

中日大辞典は、当然ながら「出人意料」を掲載する。しかも、「出乎意料之外」を収録している。いずれもが「意料外に出る、予想外なことになる」と説明している。ここでは、もはや誤用ではない。

以上を見ると、誤用が多用されて常識になった、という判断なのかとも思われる。だから収録した。

もともと誤用であるというのは、そうなのだろう。だが、魯迅が林紓の誤用を皮肉ったのだという説明には、今の私は納得しないのだ。別の解釈が成立すると考えるからである。

#### 魯迅の文章

問題にするのは、魯迅「説胡鬚」(『語絲』第5期1924.12.15影印本。のち、『墳』所収)だ。

関係する部分だけを説明する。

魯迅が旅行先の西安で歴代皇帝像の印刷物を見た。ある人がその中の1枚について、日本人の贗造だと断言したという。日本人が中国皇帝の画像を贗造したとき、自分のはねあげたヒゲを手本にして描いたから中国の皇帝であるにもかかわらずヒゲが上をむいている、というのが理由だ。日本人のその手段と考えの突飛さが、「意料の外に出る」という。原文で示すと「真可謂「出乎意料之外」了」とカッコでくくっている。あくまでも冗談にまぶしているとご了解いただきたい。

魯迅は、のちに「「意料之外」」(『隨感録』69『語絲』第154期1927.10.22影印本。

『而已集』北新書局1928.10影印本)と題する文章も発表している。従来の説明を適用すれば、よほど林紓の誤用が気に入らなかつた(逆にいえば気に入っていた)あるいは諷刺せずにはいらなかつた、ということになる。

カッコでくくっているから魯迅は特別の意味を持たせた、と誰でも考える。その典拠を探すのが研究者の仕事のひとつとなったのも当然のことだ。

以下に、今までの記述を示して番号を振る。説明をしていないものもひとつあげる。時間の推移による変化をたどるためである。

#### 林紓誤用説の発生

手元にあるものを見ると鹿地亘訳がある。

1. 鹿地亘訳、胡風選「鬚を語る」『大魯迅全集』第3巻 改造社1937.3.20

「その手段と思想の奇怪なことまことにいはゆる『意料の外に出でたり』だ」78頁

これよりほかにも日本語訳があるかもしれない。ただ、これを見る限り注釈はついていない。

注釈は、1950年代になってからほどこされるようになる。

2. 松枝茂夫訳「鬚の話」『魯迅選集』第5巻 岩波書店1956.5.22

「その手段と思想の奇抜なことたるや、実に「意料の外に出ている」(割注:「意料

に「いず」又は「意外にいず」といえばいいのに、わざとこうしたのは、林琴南の誤用を踏襲してふざけたのである」というべきだ」148頁

ここではじめて林紘の名前が出てきた。林紘の誤用であり、しかも魯迅がふざけた、と説明している。

年代順に並べると、次は中国で出版された全集になる。

3. 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1958.10/1961.8北京第3次印刷

「5 “出乎意表之外”，這是模仿林琴南文章中的錯誤辭句，原作“出人意表<sup>ママ</sup>之外”。當時林琴南和別出一些反對白話文的人，常說新文學者所以提倡白話是因為自己寫不通古文的緣故，因而當時主張白話的人也常引用他們寫的不通的古文句子，以諷刺他們的提倡古文。 283頁」537頁

「5」は注釈番号だ。林紘が間違った語句を魯迅がまねたと説明する。林紘らは白話文に反対して、古文に通じないがために白話を提唱するのだといていた。ゆえに、白話提唱者は通じない古文の文章を引用して諷刺したのだという。

古文の大家として著名な林紘が誤用した。その程度の大家である、という軽蔑の気持ちが込められていると考えてよい。

4. 竹内好訳「ひげの話」『魯迅文集』第3巻 筑摩書房1977.3.15

「方法も思いつきもまことに奇想天外、これぞ「意表の外に出る(3)」というやつではあるまいか」102頁

「(3) 意外の意味で人の意表に出る

(出人意表)というが、意表の外に出る(出乎意表之外)とはいわない。たまたま口語反対の急先鋒の林紘がこの書き誤りをした。これ幸い文語反対者が好んで逆用した」379頁

「文語反対者」には、当然ながら魯迅が含まれている。

5. 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷

次の北岡正子訳があるから、省略する。

6. 北岡正子訳「ひげの話」『魯迅全集』1 学習研究社1984.11.22

「その手段、思いつきの奇抜さたるや、まさに「意表の外に出る〔6〕」というものだ」239頁

「〔6〕「意表の外に出る」〔原文「出乎意表之外」〕。これは林琴南<sup>リンチンナン</sup>の文章の中の、意味の通らぬ語句。当時、林琴南らは、新文学の作者が白話文を提唱するのは、自分が古文に通じぬゆえであると、攻撃していた。そこで白話文を主張する人たちは、よく彼らのこのような意味の通らぬ古文の語句〔「人の意表に出る」(「出人意表」)をこのように書き誤ったもの〕を引用して、諷刺のタネとしたのである」244頁

この部分については、訳者の注釈はない。人民文学出版社版のままでよい、という判断があるものと思う。

念のため、『魯迅全集』修訂版第1巻(北京・人民文学出版社2005.11)も見たが、以前と同じ注釈であった。

以上を見れば、魯迅研究の専門家全員が、林紘を諷刺して魯迅が使用したと認定しているとわかる。例外は、ない。

だが、おかしくはないか。

#### 注釈についての疑問

林紘が誤使用した、という指摘が専門家によってなされている。

私を感じる疑問というのは、こうだ。

研究者が注釈においてそう書くなれば、林紘がどういう文章で使用したのか具体的に説明すべきだろう。しかし、その説明がない。ただ単に林紘が誤用したというだけ。前の注釈をおうむ返しに引用するのみだ。林紘批判を継承してそれに加担する結果となっている。

奇妙である。人の文章を批判してその根拠を示さないのは不公平だ。それとも根拠を示す必要がないほどに林紘の誤用は明確であるのか。魯迅と同時代の人にとってはわざわざ説明する必要のないことはわかる。だが、のちの研究者は、せめて林紘のどの翻訳作品、あるいはいかなる文章で誤用をしたのか、該当箇所を示す責任があるのではないか。古文の大家である林紘が誤用したというのなら、それくらいのことは説明してほしい。当然の疑問だと思う。だが、魯迅研究者の誰もそれを実行しようとはしない。罵ったままで知らん顔だ。

私がここで提出するのは、錢玄同の文章である。特別に珍しいというものではない。

#### 錢玄同のばあい

それは、錢玄同「“ 出人意表之外 ” 的事」(『晨报副刊』1923.1.5\*) という。

商務印書館が『小説月報』を発行しているにもかかわらず、加えて『小説世界』を新たに出している。錢はこれを見つけて話題にする。『小説世界』の執筆者たちの名前をあげ、包天笑、李涵秋、何海鳴、胡寄塵、徐卓呆、趙荅狂および林琴南である。この林紘(琴南)部分に「……林琴南(就是做“ 出人意表之外 ” 这句妙文的人)等輩」と書いている。「出人意表之外」という奇妙な句は林紘の作になる、とここで指摘した。松枝茂夫以下、中国の研究者も錢の文章によって注釈を書いたのだらうと推測できる。

では、のちの注釈者は、錢玄同の該文が根拠だとなぜ明記しないのか。

錢玄同がこの文章で「人の意表外に出る」ことだと述べるのは、『小説世界』に沈雁冰(茅盾)と王統照の名前を見つけたからだ。

雑誌目録によると、『小説世界』第1巻第1期(1923.1.10)に、王統照「夜談」と(函)斐都菲著、沈雁冰重訳「私奔」が掲載されている。雑誌の発行月日は、実際とはズレているらしい。この『小説世界』は、中国においてはあの唾棄すべき「鴛鴦蝴蝶派」文人たちの巢窟だと認定されている雑誌だ。

茅盾と王統照が、敵対する陣営の刊行物に作品を発表している。これは裏切り行為にほかならない。ゆえに、錢はふたりに向かって「名声を大事にしてほしい」と希望する。魯迅の詩「他們的花園」を引用して版元である商務印書館にも苦言を呈した。

つまり、くりかえすまでもなく、錢玄同は茅盾と王統照を批判しているのである。

魯迅全集の注釈に錢玄同の文章が根拠だと明記しない理由は、茅盾批判が行なわれているからだろう。

錢玄同の文章が発表されたのち、それを読んだ王統照は茅盾に質問の手紙を出した。茅盾は「我的説明」を書いて翻訳「私奔」を『小説世界』に発表した経緯を説明せざるをえなかった。それは『時事新報・学灯』に発表されている\*2。

茅盾は「我的説明」で次のように弁明した。

新しい雑誌に王統照と茅盾自身の原稿を渡した。しかし、それに「礼拝六派」すなわち鴛鴦蝴蝶派の作品を収録するとは知らなかった、というものだ\*3。

わざわざ説明をしなければならぬほどに重要な問題だった。考え方がかけ離れた両陣営だったということだ。

興味深いことに魯迅も錢玄同の該文を読んで文章を発表している。「關於《小説世界》」という\*4。

錢玄同の“出人意料之外”的事は、当時から魯迅の視野に入っていた事実を確認しておきたい。ただ、その時点では語句をそのまま引用はしてはいないことも見ておく。

さて、林紘の誤用だと錢玄同が指摘していることは、わかった。だが、林紘がどの作品で誤用したのかまでは錢玄同も説明しない。これについての疑問は解決していない。

錢玄同「“出人意料之外”的事」を引用したのは、時間的にみると魯迅「説胡鬚」よりも周作人の方が先だ。

周作人は、1924年7月17日付の文章「苦雨」において「意料之外」(周作人『晨报副鐫』1924.7.22。初出未見。『雨天的書』北京・北新書局1925.12。影印本。6頁)とカッコをつけて使用している\*5。このカッコはあきらかに有意である。

私が問題にしているのは、林紘の誤用そのものではないのだ。

魯迅が林紘を諷刺するためだとすれば、前後の脈絡がなにもない。なぜ、林紘諷刺が突然あらわれるのか。諷刺するのに文脈など関係ないといってしまう身も蓋もない。要は、読みの問題である。

魯迅が錢玄同の“出人意料之外”的事を引用して自分の文章のなかに「出乎意料之外」と書いたのは確かだと考える。その意図は、どこにあったのか。魯迅がこれを使用したのは、林紘批判、林紘諷刺を主目的としていない、と私は思うのだ。

林紘諷刺ではなく錢玄同に向けたもの

魯迅の文章の構造に注目しなければならない。構造といったところで大げさなことではない。文脈を指している。

「出乎意料之外」が使われるのは、日本人による贗造を述べる部分だ。中国皇帝の肖像を日本人自らのヒゲを手本にして偽造したというこの文脈に注目してほしい。何が「出乎意料之外」かといえ、その手段と考えの突飛さ[其手段和思

想之離奇」なのである。

日本人が肖像を贋造した、という文章の流れに林紘の誤用を置いて、唐突すぎて林紘諷刺にはならないではないか。林紘と偽造のあいだに関係が見いだせないからだ。読みが浅い。単純に私はそう感じる。

ここは、魯迅が錢玄同の文章「“ 出人意表之外 ” 的事」を踏まえて、言外になにを含ませたかを考える必要がある。

かつて錢玄同は、日本留学から帰国したというふれこみの王敬軒を偽造し、林紘を擁護する手紙を捏造して書いたことがある。王の名前で林紘を擁護してみせ、劉半農と組んで林紘を批判するという手の込んだ策略をめぐらせたのはあまりにも有名な話であろう。

文学革命派が仕組んだあの捏造論文事件である。敵が姿をあらわさないから手紙を捏造して林紘を誘い出した。文学革命派が勝利を収めたことになっている。現在では、誰もその正当性を疑わない。だが、普通に考えて、文学革命派の自慢にもならない愚劣な謀略である。よく考えてほしい。本質は捏造論文なのだ。捏造することがそんなに誇らしいことなのか\*6。普通の神経では、とても理解しにくい行為である。もっとも、革命だから何でもあり、というならそれはそれで納得する。

日本人が中国皇帝の肖像を贋造するという話から、日本に留学した旧知の錢玄同が王敬軒名の論文を捏造した事実を連想する。事実かどうかは定かではない肖像

の贋造と、これは事実であった論文の捏造が、贋造と捏造の言葉でぴたりと一致するのである。そういう捏造をしたことのあるご本人が「“ 出人意表之外 ” 的事」と題する文章を公表した。それを拝借して魯迅は自分の文章に「出乎意表之外」と引用したのだ。論文捏造の事情を知っている魯迅が、錢玄同本人にしか理解できない楽屋オチの部類に属するおふざけを発信したのである。

魯迅は忘れているかもしれないが、王敬軒すなわち錢玄同は例の捏造論文のなかで「真出人意外」(『新青年』第4巻第3号1918.3.15. 308頁)という語句を1カ所に使用している。もっとも、こちらは本来の正しい使用例ではあるが。

従来注釈で説明されている林紘諷刺ではなく、錢玄同ひとりに向けた魯迅の合図だと私は考える。魯迅の「その手段と考えの突飛さは、実に「意表の外にできる」ということができる」

#### 【注】

- 1) 錢玄同「“ 出人意表之外 ” 的事」初出未見。沈永宝編『錢玄同五四時期言論集』上海・東方出版中心1998.10。271頁 / 『錢玄同文集』第2巻随感錄及其他 北京・中国人民大学出版社1999.4。47頁
- 2) 以上の説明は「茅盾生平著訳年表」(『茅盾全集』附集 北京・人民文学出版社2001。45頁)にある。ただし、『時事新報・学灯』についてその発行年月日を明示しない。

- 3) 茅盾「我的説明」『時事新報・学灯』  
1923.1.15初出未見。『茅盾全集』第  
18巻 北京・人民文学出版社1989。  
340-341頁。「王統照給沈雁冰的信」  
も収録してある。
- 4) 1923年1月15日付『晨报副刊』通信  
欄に掲載。初出未見。今、『魯迅全  
集』修訂版第8巻(北京・人民文学出  
版社2005.11。137-140頁)による。ゆ  
えに、全集修訂版のままに《》を使  
用した。
- 5) ついでにいうと、同書215頁にみえる  
「山中雜信」6にこちらもカッコつ  
きで「出於意表之外」がある。とこ  
ろが、この文章は1921年9月3日付  
だ(掲載は『晨报・副刊』1921.9.6)。  
ということは、錢玄同の文章よりも  
早くなる。ここでひとつの可能性が  
発生する。最初は、用法が間違っ  
ているという意味を込めて周作人が  
「出於意表之外」を使った。この段  
階では林紓とは関係がない。それ  
を見ていた錢玄同が引用し林紓の誤  
りだと書き付けた。さらにそれを魯  
迅が引用した、という流れだ。た  
だし、以上は可能性をいうだけに  
すぎない。
- 6) 別に文章を書いた。樽本「林紓を罵  
る快樂(2)」『清末小説』第29号200  
6.12.1

## 出版社の図書目録

周振鶴編『晚清營業書目』のことなど

神田 一三

出版社が自社の刊行物を宣伝するた  
めに新聞、雑誌に広告を出すのは、清  
末においては普通に見ることができる。  
普通といっても、新聞、雑誌が数多  
く発行されるようになったという情  
況の変化に応じて出現したことだ。

それらをとりとめて冊子を発行する  
こともある。非売品、つまり無料配  
布の出版物であって、自社刊行物の  
宣伝販売を目的にしていることは  
いうまでもない。消耗品である。ゆ  
えに保存する読者は多くない。出  
版社の図書目録は、古書目録にも  
ほとんど出てこない。掲載される  
ことがあれば、自分の目を疑うほ  
どの高値がついている。必要とす  
る人がいるらしい。

### 1 文明書局、中華書局のばあい

たとえば、文明書局『図書目録』(刊  
年不記。1920年代)がある。

詩文、尺牘、補助読本、各科用書、雑

本誌第85号の公開は4月1日を予定

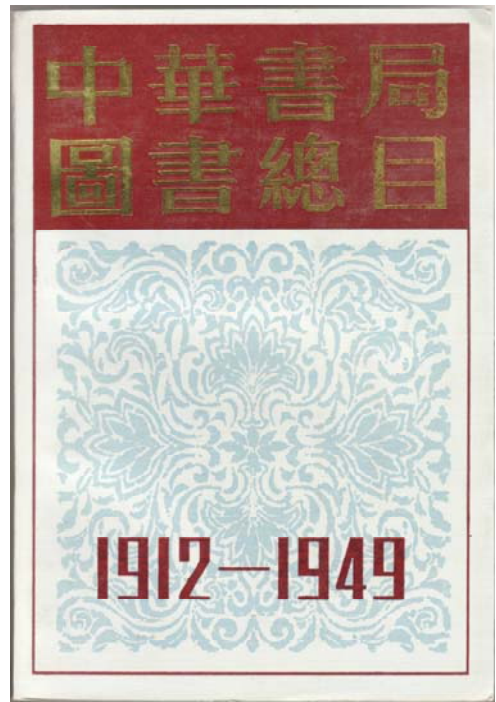


文明書局『圖書目録』

類、附録、小説、碑帖、書画金石に分類した小冊子だ。寄售書には、他社の書目を収録する。それらの出版社は、医学書局、真美善書店、良友図書公司などである。なんらかの関係があったというよりも、単に委託販売をしているだけなのだろう。

書名、冊数、定価はもれなく記載する。著者は、載せたりそうでなかったりと添え物のあつかいだ。図書目録は、販売を目的としたものだから、冊子そのものに出版年月日を明記する必要はない、という判断なのであろう。

大多数の図書目録は、必要最低限の記述しかしない。まれに内容を要約した説明がつくこともある。だが、基本的に単行本として発行されたことがわかるだけだ。



『中華書局圖書總目(1912-1949)』

時間をへて、たとえば、中華書局編輯部『中華書局圖書總目(1912-1949)』(北京・中華書局1987.3)が編集出版されている。解放前の出版物を収録して、該書局創立75周年を記念する。

時間が経過してみると、自社出版物の図書目録は、出版社にとってはみずから歩んできた歴史を語る資料ともなる。それを基礎にしてさらに手を加えた。

分野別に分類し、書名、著者、発行年月、判型および内容要約をつけている。

私が注目するのは、本図書総目にはそれぞれの単行本について発行年月を明記している点なのだ。ほかの図書目録には見ることができない。例外的な措置であって、まさに特異である。記念刊行物だからか、販売を目的にした図書目録の本来のワクを乗り越えている。ゆえに利用





『生活・読書・新知三聯書店図書総目：1932-1994』

価値が高い。

実際に編集したのは、北京図書館に勤務する趙威ら9名であった。彼らは中国国内の図書館蔵書によって確認したうえでこの詳細な図書目録を作成した。自社編集にはこだわらず、外部に委託したのも中華書局編集部の見識の高さを示しているといつてよい(惜しむらくは、書名、人名索引が作成されていない)。

これほど充実している目録であるなら、小説研究の資料となりうる。利用する側からいえば、原物に到達するため、探索の手掛かりになろうというものだ。

## 2 三聯書店のばあい

『生活・読書・新知三聯書店図書総目

：1932-1994』(北京・生活・読書・新知三聯書店1995.10)がある。

「紀念鄒韜奮先生誕辰一百周年！」と扉にうたう。上編は解放前(1932.7-1949.9)に出版した単行本を、下編はその後(1949.10-1994.12)の刊行物を収録する。統一番号をふり全4,604種になる。書名、著者、発行年月、ページ数、判型などを記録して詳細だ。書名索引と著者索引が完備しているのには目を見張る。こうあってほしいという図書目録の見本だといつていい。高く評価する理由である。

中華書局あるいは三聯書店が記念として発行した出版目録は、それほど充実している。

ならば、中華書局にとっては往年の競争者であるあの著名で巨大な商務印書館は、さらに充実した目録を発行しているだろう。期待をするなというほうが無理だ。

## 3 商務印書館のばあい

私は、商務印書館版「説部叢書」の成立を追求するために、雑誌などに掲載された出版広告を資料に使ったことがある\*1。

本稿に関係するから論文の要点を書いておきたい。商務印書館の「説部叢書」は、外国文学の翻訳シリーズである。成立した経過は以下のようなと考えている。

第一集から第十集まで各集10種類で合計100種が完結するのは1908年である。同年、作品の一部を入れ替えて改組のうえ全部を箱入りで発売する。1913年、初集



『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』

と改称した。

論文執筆時は見ることができなかった商務印書館の図書目録がある。

商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』(上海・商務印書館 光緒三十三年(1907)年七月 非売品\*2)だ。

掲げた図版は、表紙と裏表紙(内容は目次)である。

見開き奇数ページには、たとえば目次にある「光緒三十三年中西合歴表」を掲げ、偶数ページには自社刊行物を掲載する。そのほか電報用漢字符号一覧表とか、列車の時刻表価格表であったりする。日常生活に必要な附録をつけてはいるが、実態は図書目録である。

初等小学教科書、高等小学教科書、中学教科書、高等学堂教科書、簡易課本、初級師範学堂教科書、優級師範学堂教科書、実業学堂教科書、学堂参考書、外国語学教科書、華英字典類、地図類、政法類、経済財政類、警察類、哲学類、史伝類、地志類、問答類ときてようやく小説類になる。『繡像小説』は、この小説類に

含める。あとは、雑書類、雑誌類などである。

小説類は、まず「欧美名家小説」10種をあげる。翻訳小説を前面に押し出すのだ。つづいて、「説部叢書」第一集から第九集までを掲げる。

商務印書館の「説部叢書」についての注目点は、上に述べたようにふたつある。ひとつは、1908年の改組だ。作品の一部を入れ替える。もうひとつは、1913年の改称だ。それ以前の第一集から第十集をまとめて「初集」とくりなおす。何度も書くのは、商務印書館版「説部叢書」についてこのように説明する文章を見ることは多くないからだ。この区別が、図書目録の発行時期を推測する手掛かりにもなっている。

創業10周年目録には、第一集として佳人奇遇、経国美談、夢遊二十一世紀、補訳華生包探案、小仙源、案中案、環遊月球、吟辺燕語、美洲童子万里尋親記、黄金血(72ウ、73ウ)をあげている。

1908年の改組では、『佳人奇遇』が『天際落花』に、『経国美談』が『劇場奇案』に差し替えられることを思い出してほしい。

また、「説部叢書」後半のいくつかには定価が書かれていない。つまり、未発行であることを意味する。一集に10種の翻訳小説を収録するのが基本的な形だ。第九集には6種類の書名しかあげられていないところから、「説部叢書」が発行途中だということがわかる。

掲げられた「説部叢書」の構成作品を

見ただけで、この冊子の発行が1908年以前であることがわかる。わかるものにも、商務印書館の創業10周年は1907年だ。それらの事実と、創業10周年目録の発行年月は矛盾がない。

『繡像小説』には「自一至七十二期」と注記してある。

これで思い出すのは、該誌停刊時期について張純が提出した推測である。

『繡像小説』第70期所載の吳蒙「学究新談」第23回に「軍機大臣袁世凱」が出てくる。袁世凱が軍機大臣になったのは、光緒三十三年七月丙辰(1907.9.4)だ。ゆえに、第70期はそれ以後、すなわち七月以後に発行された。これが張純の推論であった。

樽本照雄が指摘する光緒三十二年年末停刊と七ヵ月のズレが生じる。

1907年10月9日付『時報』および『中外日報』には、商務印書館が出稿した『繡像小説』の広告が掲載されている。該誌の編者は南亭亭長(李伯元)だ、と商務印書館自身が宣伝する。『繡像小説』の編者は李伯元か否かという問題は、これで解決をみた。だが、1907年10月9日の日付では、停刊問題を解き明かすことはできない。張純の推測を突き崩すことは無理だ。

だが、停刊問題を解決する資料は、実のところすでに見つかっている。

当時、上海で発行されていた新聞に商務印書館が広告を出している。これが証拠となる。

光緒三十二年十二月十八日(1907.1.31)

『中外日報』

商務印書館繡像小説第七十二期 每册大洋二角是書三年屆滿現擬停刊明歲大加改良屆期再行布告

上海棋盤街商務印書館

ここには、『繡像小説』が三年分の72期を刊行し停刊すること、明年に大改良を行なうことが書かれている。光緒三十二年年末に停刊したことは明らかであろう。

見てほしい。創業10周年目録は、光緒三十三年七月に発行されている。しかも『繡像小説』が72期で完結しているという記述がある。これを合わせて考えれば、光緒三十三年七月丙辰以後に第70期が発行された、という張純の推測は否定される。

『中外日報』の広告記事と上の創業10周年目録の記述とあわせて見れば、該雑誌の停刊を光緒三十二年年末だと考えるのは、資料の裏付けがある妥当なものだと思うのだ。

これが創業10周年を記念した図書目録だ。あらためて目次を見れば、この時期の商務印書館が教科書の編集出版を中心とした出版社であったことが理解できるだろう。

商務印書館は、1903年に日本の金港堂と合併している。ところが、創業10周年目録には合併について一言も説明していない。事実を徹底して隠し通そうとした。これが、中国図書公司から、また中華書局から攻撃される原因となったのは広く



商務印書館『圖書彙報』第118期



商務印書館『圖書彙報』第121期



商務印書館『圖書彙報』新6号



『商務印書館說部叢書三集樣本』



商務印書館『小説書目』

知られていることだ。

私の手元には以下のような図書目録がある。

商務印書館『圖書彙報』第118期1927.4

商務印書館『圖書彙報』第121期刊年

不記(民国十九[1930]年二月廿八日止)

商務印書館『圖書彙報』新6号1931.3

教科書類を先頭においた総合的な図書目録である。そう頻りに発行するものではなからう。せいぜいが年に1度出れば

いいほうだと思う。また、必要に応じてある分野を特化させた目録も出版している。

『商務印書館訳印説部叢書三集様本』(1920年か)  
商務印書館『小説書目』刊年不記  
(1924年以降)

くりかえすが、販売を目的としているから冊子の発行年月は基本的に記載されない、と考えてもいい。

これらの冊子には、収録した翻訳小説について原作者名、原作名を注記しているばあいがあって便利である。

ただし、この便利さが誤解を生じることにもなった。1例をあげよう。以下の作品についてそれぞれの目録が原作を明示している\*3。

(神怪)鬼山狼侠传 林紓訳 2冊 1元

『商務印書館訳印説部叢書三集様本』

原作の記載なし

『小説書目』27頁 <sup>ママ</sup> ATYWAYO AND HIS  
WHITE NEIGHBOUR

『図書彙報』第118期194頁 <sup>ママ</sup> ATYWAYO  
AND HIS WHITE NEIGHBOUR

『図書彙報』第121期202頁 <sup>ママ</sup> ATYWAYO  
AND HIS WHITE NEIGHBOUR

『図書彙報』新6号 作品の記載なし

ハガード Henry Rider Haggard の原作は、“CETYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR” だという意味である。そうであれば、1882年発表のノンフィクシ



『商務印書館圖書目録(1897-1949)』

ョンだ。

林訳小説については、馬泰来による一連の研究がある。原作の探究が深くなされていて研究者には必見の著作であることはいうまでもない。そこで、馬泰来「林紓翻訳作品全目」(錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11)を見る。彼は、この原作を指摘して“NADA THE LILY” 1892という。注に「寒光、朱羲胄、曾錦漳、韓迪厚らはみな誤っている」(62頁)と書いている。

すなわち、商務印書館が自社の刊行物について翻訳ものの原作を誤記しているのを後の研究者(馬泰来を除く)がすべてそのままウのみにしたということである。一般にあって、出版元の記述なのだからまさか誤記があるとは思わない。原物で

点検した馬泰来が研究者として優れている点である。

そういう経緯がある。延長線上に『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981。1949-1980年分を収めたものも1981年に出ている)をどうしても見てしまうのだ。馬泰来の著作は商務印書館の刊行物に収録されている。当然、図書目録も該書を参照して間違いを訂正しているだろうと考える。

商務印書館が創立85周年を記念した出版目録だ。さきに紹介した『中華書局圖書総目(1912-1949)』あるいは『生活・読書・新知三聯書店圖書総目:1932-1994』がよくできているので、商務印書館の記念目録にも期待した。

ところが、これがガッカリする結果となる。

見た目には、総類、哲学、宗教、社会科学、語文学、自然科学、応用技術、芸術、文学、史地および叢書総目録となっていて盛りだくさんだ。著者を明らかにしているのはよろしい。だが、肝心の出版年月の記載がない。大きく落胆した理由である。せめて初版の発行年だけでもあれば、まだ資料として利用できたものを、と残念でならない\*4。

さきに示した林紓訳『鬼山狼侠传』の原作は、やはり“<sup>ママ</sup> A TYWAYO AND HIS WHITE NEIGHBOUR”(93頁)と誤ったままだ。馬泰来の訂正は目に入らなかったらしい。同じ商務印書館の刊行物であるにもかかわらず、社内の連絡が悪いのか。別々の仕事として独自に進めたのだ

ろう。小さく落胆した理由である。

編集部が書いたのだろうが「説明」のなかで、80年以上の歴史があるから多くの資料が紛失していると弁解する。それをいうなら中華書局、三聯書店でも同じだろう。だが、記念図書目録については、中華書局と三聯書店にできることが、商務印書館にはできなかったのが私にとっては不思議であった。商務印書館には優秀な編集者が在籍しているはずなのに、この無惨な結果である。

出版社の図書目録は、販売宣伝の目的で発行されたとはいえ、使いようによっては研究資料となることは、以上に述べた通りだ。

中国でもこの出版目録に注目する研究者がいた。周振鶴編『晚清営業書目』(上海・世紀出版集団、上海書店出版社2005.4)である。

#### 4 『晚清営業書目』のばあい

周振鶴によると、彼は、『申報館書目』、『続書目』から1904年、1909年の商務印書館の新書目録まで1枚ものの書目を含めて約20種類を収蔵しているのだそうだ\*5。

図書目録を研究資料として利用する考えをもった研究者がいるということに、今さらながら感心する。所蔵するだけでなく、資料をみなで利用できるように積極的に公開したのには、感動すらおぼえるのだ。

官営と民営に分ける。それぞれの書目名があるが出版社名で代表させて下に示



周振鶴編『晚清營業書目』

す(カッコ内は発行年)。

官営(官書局)として浙江図書館(刊年不記)、湖北官書処(刊年不記)および附録で官書局書目彙編(1930)を収録する。

民営出版社の目録は次のとおり。

申報館(1877)、商務印書館(刊年不記、1906?)、掃葉山房(刊年不記)、同文書局(刊年不記)、飛鴻閣(刊年不記)、緯文閣(刊年不記)、十万卷樓(刊年不記)、鴻宝齋分局(刊年不記)、申昌書局(刊年不記)、宝善齋書莊(刊年不記)、汲綆書莊(刊年不記)、慈母堂(1898)、広智書局(刊年不記)、時中書局(1910)、科学図書館(刊年不記)。附録として「上海書業公所書底掛号」(1904)がある。

いちいち「刊年不記」と記載するのはわずらわしかったかもしれない。だが、

図書館というのはいさだかということを知ってもらうためにあえて書き加えた。

私が注目するのは、商務印書館のものだ。正式な書名は『商務印書館出版教科書目』というらしい。

なにしろページ数が多い。この本全体の約28%を占めている。ほかの出版社では1枚ものがあるなかで、商務印書館のは冊子になっているからだろう。

刊行年月は印刷されていないらしい。だが、周振鶴は、刊行年は1906年春だと推測した。その根拠について次のように書いている。

「該館が光緒三十二年四月に増訂出版した『商務印書館出版書目』と対照すると、本書目はほぼ光緒三十二年春に出版された」(220頁)

「光緒三十二(1906)年四月」と明記する書目が別にあると彼はのべる。それと比較対照したというのだが、こちらの発行がなぜ同年の春になるのか、説明がない。説明がないから、納得がいかない。

だいたい、周振鶴は解説において彼が所蔵する商務印書館の新書目録は1904年と1909年のものだと言っていたのではないか。それと一致しない。新書目録ではなく別の書目なのだろうか。

彼が1906年春だと推測する根拠は、想像できなくもない。

たとえば、『繡像小説』の箇所には72冊を出版したと読める(362頁)。中国の学界における「常識」は、『繡像小説』が停刊したのは「光緒三十二年三月」ということになっている。ならば、商務印書館の

書目は同年春であってもよい。こちらあたりが周振鶴の論拠ではなかろうか。

だが、前に紹介したように『繡像小説』が停刊するのは、光緒三十二年年末である。周振鶴の推測(だとして)は、この点で成りたない。

もうひとつ、彼は『東方雑誌』についての記述も見るべきであった。かっこ内に西暦をおぎなう。

東方雑誌零售每冊三角，全年十二冊三元。甲辰(1904)年十二冊二元五角，乙巳(1905)年十二冊二元五角，丙午(1906)年十三冊三元，丁未(1907)年十二冊三元，戊申(1908)年十二冊三元，己酉(1909)年十三冊三元二角五分(346頁)

丙午年と己酉年が13冊であるのは、閏月があるからだ。

ここを見ただけで、この書目は、1909年以後に出版されたと簡単に想像がつく。1910年あたりが妥当なところだろう。ならば、『繡像小説』全72冊が刊行されているのも当然ということになる。

さらに「説部叢書」がある。100種合計131冊<sup>\*6</sup>、木箱に入れて定価28元だとある。

書名を見れば、『天際落花』と『劇場奇案』が最初に出てくる。明らかに改組後のものだ。これを根拠として該目録の刊行は1908年以後となる。

以上を総合して、『晚清営業書目』に収録する商務印書館の図書目録は、1910年頃の発行だと推測する。 罫

## 【注】

- 1) 神田一三「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号2002.12.1。『商務印書館研究論集』収録
- 2) 柳和城氏に資料のお世話になった。以下の文章がある。柳和城「1907年商務印書館紀念冊序文」『出版史料(叢刊)』第3輯2002.9。柳和城「1907年的商務印書館紀念冊」『清末小説』第25号2002.12.1。以下、創業10周年目録と略称する。
- 3) ハガードの漢訳については、樽本「漢訳ハガード小考 『血泊鴛鴦』の原作」(『清末小説から』第77号2005.4.1)を参照のこと。
- 4) 書目の分類に関してと資料としての不足について李家駒が批判する。李家駒『商務印書館と近代知識文化的伝播』(北京・商務印書館2005.2)、148-150頁。なお、商務印書館(香港)有限公司編集『商務印書館と廿世紀中国光碟』(香港・商務印書館1997.10)があると李はいうが、未見。
- 5) 周振鶴「晚清西学流程度的一個視角(代前言)」『晚清営業書目』3頁
- 6) 記載の通りを数えれば127冊にしかない。記入もれがあるのではない。各種の目録で冊数はまちまちだ。『上海指南』(商務印書館 宣統元(1909)年五月初版/七月再版)では128冊、前出商務印書館『小説書目』では132冊とする。『東方雑誌』第8巻第1号で計算すると130冊。1981年の図書目録で数えれば132冊である。どれが正



しい数字なのか。

事実は、131冊だ。131冊と132冊の違いはどこから出てきたのか。初集第46編『海外軒渠録』は、1冊本である。ただし、本文巻上56頁、巻下93頁(94頁は空白)であって奥付に「二冊」と書かれている。これが132冊の根拠なのだろう。別の版本では2冊になっている可能性を否定しない。だが、ページ数からして2冊に分ける必然性もないから、私は「二冊」とあるのは誤植だと考える。

### 『清末小説』第29号

2006.12.1

英訳「老殘遊記」.....樽本 照雄	
去粗取精 去偽存眞	
中英對照版《老殘遊記》編后	
.....許 冬平	
劉鐵雲著作十二種試説.....劉 徳隆	
ゴールドスミス最初の漢訳小説	
.....沢本 香子	
在社會思想政治劇烈變動的年代里	
黄世仲十年南洋生活行踪考	
.....顔 廷亮	
黄世仲生平考辨二題.....郭 天祥	
吳趸人諛藥辨 .....郭長海 郭建鵬	
商務印書館の日本人投資者.....樽本 照雄	
蔣維喬日記中的小説林社史料...欒 偉平	
林紓を罵る快樂(2).....樽本 照雄	
李伯元遺稿(8) 李錫奇『南亭回憶録』より	

晚清小説作者掃描(玖)

武 禧

(零三六)

濁物

小説創作:《七續彭公案》、《八續彭公案》

濁物:不見任何著録。《中國小説總目提要・八續彭公案》云:“濁物,吳地人”。

《七續彭公案・弁言》作者署名爲“同里閩瀨江張逸軼凡氏”。又《弁言》有“與濁物居同里,幼同塾,長而友善”。“同里”或解爲“同鄉”。但從文義解,此“同里”非“同鄉”之義,而是地名。同里屬蘇州,爲著名旅遊地。與“吳地人”相吻合。由此可知,濁物是蘇州同里人,或幼年居住同里。濁物撰《七續彭公安》自謂“彭公之愛國勤民,不憚勞瘁,讀之足以勸忠;歷載奇案,申冤理屈,讀之足以增識;黃三太、馬玉龍衆英雄任俠好義,讀之足以使忠義之心油然而生”。此是濁物“就書言書”,強調自己著作的作用。“至於一往無前,毫無退怯,非所謂尚武精神耶?爲亂必敗,積德必興非所謂勸善而懲惡耶?予何謂其有害於世道人心哉?吾因其有益於世,而坊間新出之續集足以累之也。故不

憚焦心竭慮，另撰新編六集，以足其未盡之義焉！”這是作者對小說功能的認識。

濁物，又為治逸著《新七俠五義》。治逸待考。

(零三七)

云間花也怜濃

小說創作：《海上花列傳》、《太仙漫稿》、《和尚橋記》

云間花也怜濃（濃一作農）：名韓邦慶（1856-1894），字子云，號太仙。又署三慶、韓慶、韓奇、大一山人、江陵漁隱等。江蘇松江（今屬上海市）人。其父韓宗文曾任刑部主事，素負文譽。韓邦慶幼年隨父居住京師，后南歸考取秀才，但屢次考舉人不第。曾任幕僚，終因性格不合而至上海為《申報》館撰述文稿。1892年，他創辦了中國第一份小說期刊《海上奇書》，由《申報》館代售。而他的小說《海上花列傳》就在《海上奇書》上連載。當時，“小說風氣未盡開，購問者鮮，又以出版屢屢愆期，尤不為問者所喜，故銷路平平”。刊物先是半月一期，后改月刊。每期刊《海上花列傳》兩回，每回配精美插圖兩幅；堅持了八個月，共出十五期，終於停刊。此后，小說仍繼續創作，在刊物停辦后的十個月左右完成全書。小說出版不久，韓邦慶病逝，年僅三十九歲。韓邦慶為人淡於功名，瀟灑絕俗。雖然家境寒素而從不視錢如命；彈琴賦詩、自怡自得；尤其擅長圍棋，與好友對坐，氣宇閑雅，一派名士風度。唯少年時即染上鴉片癮，又耽迷女色，出入滬上青樓，將所得筆資盡情揮霍，因此而入不敷出，捉襟見肘

主要小說著作為《海上花列傳》，又名《海上花》、《海上看花記》、《清樓寶鑑》、《海上百花趣樂演義》、《海上春花記》、《最新海上繁華夢》等。《海上花列傳》是中國第一部方言小說。對話全用蘇州話。作者自謂《海上花列傳》的結構是從《儒林外史》蛻化而來，並使用了“穿插”、“藏閃”等技巧。描繪人物性格，刻畫人情世態，細膩傳神。寫妓女亦個個不同，有好有壞，不像《青樓夢》那樣將妓女理想化，較近於寫實，有“平淡而近自然”的特點。韓邦慶另著有文言短篇小說《太仙漫稿》十二篇，採用《聊齋志異》的藝術手法，但不落前人窠臼，聲明“征實者十一，構虛者十之九”（《太仙漫稿·例言》），說“鬼”而不信鬼，見出時代風氣的轉移。又著小說《和尚橋記》。

(零三八)

嶺南韜晦子少值

小說創作：《曇花偶見傳》

嶺南韜晦子少值：未見任何著錄。待考。

(零三九)

霽溪八詠樓主

小說創作：《蜃樓外史》

霽溪八詠樓主：姓名、出生年月情況不詳。霽溪是浙江吳興的別稱。故知其為浙江人。

(零四零)

古鹽官伴佳逸史

小說創作：《臺灣巾幗英雄傳·初集》

古鹽官伴佳逸史：姓名、出生年月情況不詳。鹽官爲漢時地名，其確切位置待考。三國、隋唐后之鹽官，爲今之浙江海寧。或疑爲海寧人。

(零四一)

高太癡

小説創作：《夢平倭奴記》

高太癡(1863-1920)：江蘇蘇州人(一説爲上海松江人)。名高翀、又名瑩，字俊芬、號太癡、悟軒。別署甚多，有侶琴、帳花、孤芳、玉琴仙侶、漱芳齋主、云水山人、小窗金縷翠箋詞客、清遠道人等。晚年號遲藏齋。常年居於上海。少年時擅長作詩填詞，頗有文名。1883年20歲時任江蘇按察司書記。出入青樓，言行不檢，1884年被辭退。1885年以厘捐局會計謀生。此后到天津擔任《時報》編輯，后又任《申報》助理編輯。曾以賣字畫爲生。三進三出《字林滬報》爲編輯或主筆，主持文藝性附張《漱芳詩選》的編選工作。1887年4月出任《蘇報》主筆。又編輯出版中國最早的文藝性副刊《消閑報》。1897年考取秀才。1900年接任《同文滬報》總編纂，次年春即離開《同文滬報》，接受曾慕濤侍郎的推薦，應征清政府的經濟特科，未果。入商界，爲中英大藥房祕書。民國初年組織希社，與老友詩酒唱和，於《希社叢編》自稱“三十年前舊太癡”。

高太癡小説創作有《夢平倭奴記》。另有《退藏齋題畫詩》、《退藏齋筆記賸》等詩文。又編有《希社叢編》。高太癡就職於多家新聞媒體，結交廣泛，著作甚多，惜未見系統整理者。

囧

『近代文学研究・留得』第7期(2006.7)、第8期(2006.8)が発行されました。第8期は、研究者郭長海を特集しています。

第9期(2006.8下旬)は、長春会議特集です。中国近代文学国際學術研討会および第13回年会の模様について報告があります。第10期(2006.9)は、小説分会特集。

清末小説から

王 泉根 (『安徒生童話の中国闡釈』)

序1 李紅葉『安徒生童話の中国闡釈』北京・中国和平出版社2005.5

与200歳の安徒生相遇(『安徒生研究一百年』前言) 王泉根主編『安徒生研究一百年』北京・中国和平出版社2005.7

曹 文軒 (『安徒生童話の中国闡釈』)

序2 李紅葉『安徒生童話の中国闡釈』北京・中国和平出版社2005.5

韓 洪拳 『林訳小説研究 兼論林紓

自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7

郭 豫適 (『林訳小説研究 兼論林紓

自撰小説与伝奇』)序 韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7

- 陸 昕 『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵鑑賞書系
- 梁 敏兒 《老残遊記》の写景：伝統風景構図の瓦解 『桃の会論集』3集 小南一郎先生退休紀念論集 刊年不記2005.9?
- 侯 運華 『晚清狹邪小説新論』開封・河南大学出版社2005.12
- 邵 盈午 『情僧夢露：蘇曼殊画伝』北京・團結出版社2006.1
- 錢 林森 清点學術家底，展現学科図景 《中国比較文学百年書目》序言 唐建清、詹悦蘭編著 『中国比較文学百年書目』北京・群言出版社2006.1
- 夏 曉虹 梁啓超の文類概念辨析 夏曉虹、王風等著 『文学語言与文章体式 從晚清到“五四”』合肥・安徽教育出版社2006.1
- 楊 早 啓蒙の兩種向度 晚清京滬白話報之比較(1904-1906) 夏曉虹、王風等著 『文学語言与文章体式 從晚清到“五四”』合肥・安徽教育出版社2006.1
- 張惠民、李潤波 中国報紙源流考 『老報紙収蔵』杭州・浙江大学出版社2006.2
- 遊佐 徹 『天演論』と『吳京卿節本天演論』 『天演論』の読まれ方についての一考察 岡山大学文学部 『中国文史論叢』第2号 2006.3.1
- 孔范今、施戰軍主編、陳晨編選 『中国新時期新文学史研究資料』上中下3冊 甲種 濟南・山東文藝出版社2006.4 中国新時期文学研究資料彙編
- 竹村則行 明治日本の『支那文学史』と清末民初中国の『中国文学史』 『九州中国学会報』44巻 2006.5.13
- 袁 進 『中国文学的近代变革』桂林・広西師範大学出版社2006.6
- 楊 聯芬 『流動的瞬間 晚清与五四文学關係論』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2006.6
- 潘建国 『古代小説文献叢考』北京・中華書局2006.5
- 晚清汪康年出版《巴黎茶花女遺事》始末考
- 晚清時期小説徵文活動考論 《松蔭庵漫録》与《申報》所載晚清筆記小説
- 晚清金陵画家王冶梅与《金古奇聞》小説古代通俗小説目錄学論略
- 晚清揚州吳引孫測樓及其所蔵通俗小説馬廉不登大雅堂蔵書及其所蔵通俗小説周越然言言齋所蔵通俗小説輯考
- 稀見小説研究史料四種
- 關愛和 『中国近代文学論集』北京・中華書局2006.5
- 凝思於古典与現代之間 序關愛和《中国近代文学論集》 .....劉增杰
- 梁啓超与文学界革命
- 別創詩界的黃遵憲

譚嗣同文学略論  
晚清戲曲改良運動述略  
守望藝術的壁壘 論桐城派對古文文體的價值定位  
稗官爭說俠與妓 十九世紀中國長篇白話小説的創作主旨與主題模式  
論老殘  
清末常州詞派概說  
二十世紀初文学變革中的新舊之爭 以  
後期桐城派與「五四」新文学的衝突  
與交鋒為例  
「五四」之後新文学家對桐城派的再認識  
柳詒子簡論  
蘇曼殊識作述評  
辛亥革命烈士寧調元詩文簡論  
《中國近代文学史》緒論  
二十世紀中國近代文学研究述評  
探尋中國文学從古典到現代的轉型歷程  
中國近代文学研究的世紀回眸與前  
景矚望 .....王飆、閔愛和、袁進  
  
郭延禮『中國前現代文学的轉型』  
濟南·山東大学出版社2005.10  
第1章中國文学由古典向現代的轉型及其  
文学史意義  
第2章伝媒、稿酬与文学的近代化  
第3章中國近代文学史的分期  
第4章中國近代文学的起訖年代  
第5章“五四”這塊文学界碑不容忽視  
第6章中國近代文学精神  
第7章西方文化与近代小説形式的變革  
第8章近代外国文学紹介中的文化選取意  
向及模式

第9章20世紀中國近代小説在全球的傳播  
第10章世紀回眸：20世紀初的中國翻譯小説  
第11章福建人与中西文化交流  
第12章中西文化交匯中的近代文学理論  
第13章翻譯文学与中國文学的近代化  
第14章詩界革命的起點、發展和評價  
第15章黃遵憲的開放意識及其詩歌的審美  
取向  
第16章梁啟超後十年的文学研究  
第17章嚴復、林紓並非桐城派作家  
第18章重新認識中國近代小説  
第19章近代女性文学的新氣象  
第20章黃世仲的小説理論及其在中國小説  
理論史上的地位  
附錄：20世紀中國近代文学研究學術歷程  
之回顧  
  
胡全章『伝統与現代之間的探詢  
吳趸人小説研究』  
開封·河南大学出版社2006.5  
序 .....閔愛和  
引 言  
第1章作為報人与職業小説家的吳趸人  
第2章現實批判：聚焦人間“怪現狀”  
第3章道德救世：伝統道德的極力張揚  
第4章“文明境界”：瑰麗的烏托邦藍圖  
第5章吳趸人小説的敘事特徵  
第6章吳趸人小説的文体意識  
結 語  
附錄1 吳趸人小説創作系年  
附錄2 《海上名妓四大金剛奇書》作者  
“抽絲主人”考  
附錄3 吳趸人小説評點者身份考略

樽本照雄著

# 漢訳アラビアン・ナイト論集

A5判 上製 箱入り 282頁 限定200部 定価：6,300円

アラビアン・ナイトの漢訳が出現するのは、1900年前後からです。翻訳の歴史は長いといえます。しかし、研究についていうと、その蓄積はそれほどありません。その理由は、簡単なことです。当時の翻訳者が、漢訳するさいに使用した英文原書を特定することができなかったからです。底本を知らなければ翻訳の質を論じることが不可能であることは、理解できるでしょう。ここにアラビアン・ナイトの複雑な出版の歴史が存在します。つまり、最初がフランス語訳、あるいは英語訳だったのをもとにして数多くの改訳本が出版されたのでした。漢訳者は、どのバージョンを使用したのか、まったく雲をつかむような話です。

本書では、中国におけるアラビアン・ナイト翻訳の歴史をたどります。中国の研究者が明らかにできなかった底本についてできる限りの調査をしたその結果を報告します。

周作人の著名な翻訳「侠女奴」の原書を追求しました。訳者自身がいう出版社の刊行物ではないことを明らかにします。原物を探し出せば、その事実は動かしようもありません。周作人が何度も証言しているにもかかわらずです。

商務印書館の「童話」シリーズに見られるアラビアン・ナイトについて紹介します。また、なぜ「天方夜譚」と呼ぶようになったのか、などなどの論考を収録しました。

樽本照雄著

# 商務印書館研究論集

A5判 上製 箱入り 320頁 限定150部 定価：7,350円

商務印書館にかかわる論文を集めました。商務の刊行物、あるいは関係した日本人たち、またほかの出版社との交渉などなど、です。新しく発見された日本金港堂との合弁を解消する契約書について紹介するのをはじめ、商務印書館の火災に関する最新の知見を加えています。アメリカ長老派教会の印刷所である美華書館は、商務印書館と人的関係がありました。探求していく過程で、その名称について従来からの誤解を訂正する結果になっているのです。

清末小説研究会

●日本から清末小説研究界へ向けて発信する――

# 漢訳ホームズ論集

大阪経済大学教授  
樽本照雄 著

英国作家コナン・ドイルが創作した私立探偵シャーロック・ホームズ物語は、中国でも読者の大歓迎を受けた。

梁啓超が関係する雑誌で翻訳されて以来、各種雑誌に掲載された。清末民初に発表されたホームズ物語の漢訳は、おびただしい数にのぼる。作品によっては日本より早く、あるいは遅く、また、原作発表とほとんど同時に漢訳がでてる状況があった。その漢訳全集は複数種類が出版されてもいる。

五四時期に作家となった人々の多くはそれらを読み、またそのなかから翻訳に手を染める人も出てきた。

日本における翻訳ホームズに勝るとも劣らない流行があったにもかかわらず、その歴史的事実は現在ではややもすれば忘れられそうになっている。その理由は、当時から文学革命派より軽蔑され攻撃され続けてきたからだ。

中国の研究界において漢訳ホームズ研究は、一九六〇年代に受けた批判から完全には立ちなおっていないかのように見うける。中国においてホームズ物語がどのように消されていったのか。まず、研究方面から説明する。

つぎに、ホームズ物語が中国において受容された歴史をたどる。中国人はドイルのホームズをどのように漢訳してきたのか。そのはじめりからのべる。翻訳状況をありのままに追跡する。概論ではこぼれてしまう部分に注目したい。ゆえに、原作英文と漢訳を詳細に比較対照することになる。これが、私の興味を中心にある。

いわば、中国で埋もれてしまった漢訳ホームズを日本で発掘する試みなのだ。

## 【内容目次】

### 漢訳ホームズ研究小史

0 日本と中国 / 1 一九四〇年代以前 / 2 一九六〇年 / 3 一九六〇年代 / 4 一九七〇年代 / 5 一九八〇年代 / 6 一九八〇年代末 / 7 一九九〇年代

### 「唇のねじれた男」の日訳と漢訳

1 導入部 / 2 事件の発端 / 3 事件の追求 / 4 事件の解決

### 中国におけるホームズ物語

1 漢訳ホームズ物語 / 2 漢訳ホームズ物語の反響 / 3 「泰西説部叢書之一」と「議探案」 / 4 「続包探案」 / 5 「華生包探案」 / 6 書名の謎 / 7 「四つのサイン」 / 8 「緋色の研究」 / 9 周桂笙の漢訳「竊賊命破命遺像案」 / 10 「福爾摩斯再生案」の謎 / 11 「妖犬退治記 降妖記」ほか

### 漢訳ホームズ「緋色の研究」

1 漢訳「緋色の研究」がいつばい / 2 「恩讐の血 恩仇血」と「シャーロック最初の怪奇事件 歇洛克奇案開場」 / 3 読者の反響 / 4 結論

### 「華生包探案」は誤訳である

1 「華生包探案」という書名の謎 / 2 「采蘊」のこと

### 附録・漢訳コナン・ドイル小説目録

あとがき 索引

(本文は横組)

▼A5判上製・カバー / 440頁 / 定価9450円  
ISBN4-7629-2775-9 C3090

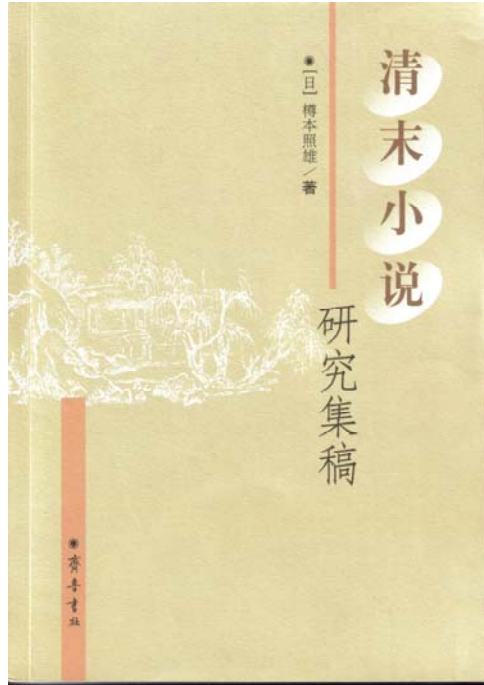
汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4  
電話 03 (3265) 9764 FAX 03 (3222) 1845  
E-mail:kyuko@fancy.ocn.ne.jp (営業部)

樽本照雄著 陳薇監訳

# 清末小説研究集稿

A5判 240頁 中国・齊魯書社2006.8



収録した24本の論文は、全文が中国語（簡体字）です。清末小説と関連する事柄について中国語で発表したもの、あるいは中国語に翻訳された文章を集めています。

各論文の内容を要約すると以下のようになるでしょう。

日本における清末小説資料を紹介する。劉鉄雲と交流のあった日本人を調査する。「老残遊記」についての諸問題を解決する。『繡像小説』の編集長をめぐる論争経過を紹介し決定的な資料を提出する。『繡像小説』の刊行が徐々に遅れている事実を明らかにする。「官場現形記」の真偽問題を追求する。李伯元と吳趸人が経済特科にどのように関わったかを新資料にもとづいて解説する。今まで不明のままであった吳趸人『電術奇談』の日本語底本を探し出す。阿英「晚清小説目」の特徴と限界をはっきりさせる。『遊戯報』に見える周樹人ははたして魯迅なのか、と疑問を出す。魯迅「斯巴達之魂」の創作部分に大きな問題があることを指摘する。商務印書館と金港堂の合併問題を概説する、などなどで

諸論文には、それぞれに新しい発見があることに気づかれることでしょう。